

地域の高等学校との 福祉教育に関する連携活動について

安定した福祉人材の確保と地域共生社会の実現に向けて

2024年8月

高齢者総合福祉施設

フルーツ・シャトーよいち

社会福祉法人 よいち福社会
特別養護老人ホーム フルーツ・シャトーよいち

副施設長兼相談課長 吉崎春恵

社会福祉法人と高校の連携活動によって それぞれの課題解決に寄与する取り組み

当法人

介護人材
の確保



高校

福祉教育
就職支援



地域

地域共生社会
の実現



北海道余市町のご紹介

余市町



ニッカウヰスキー
余市蒸留所



フルーツ



ワイン

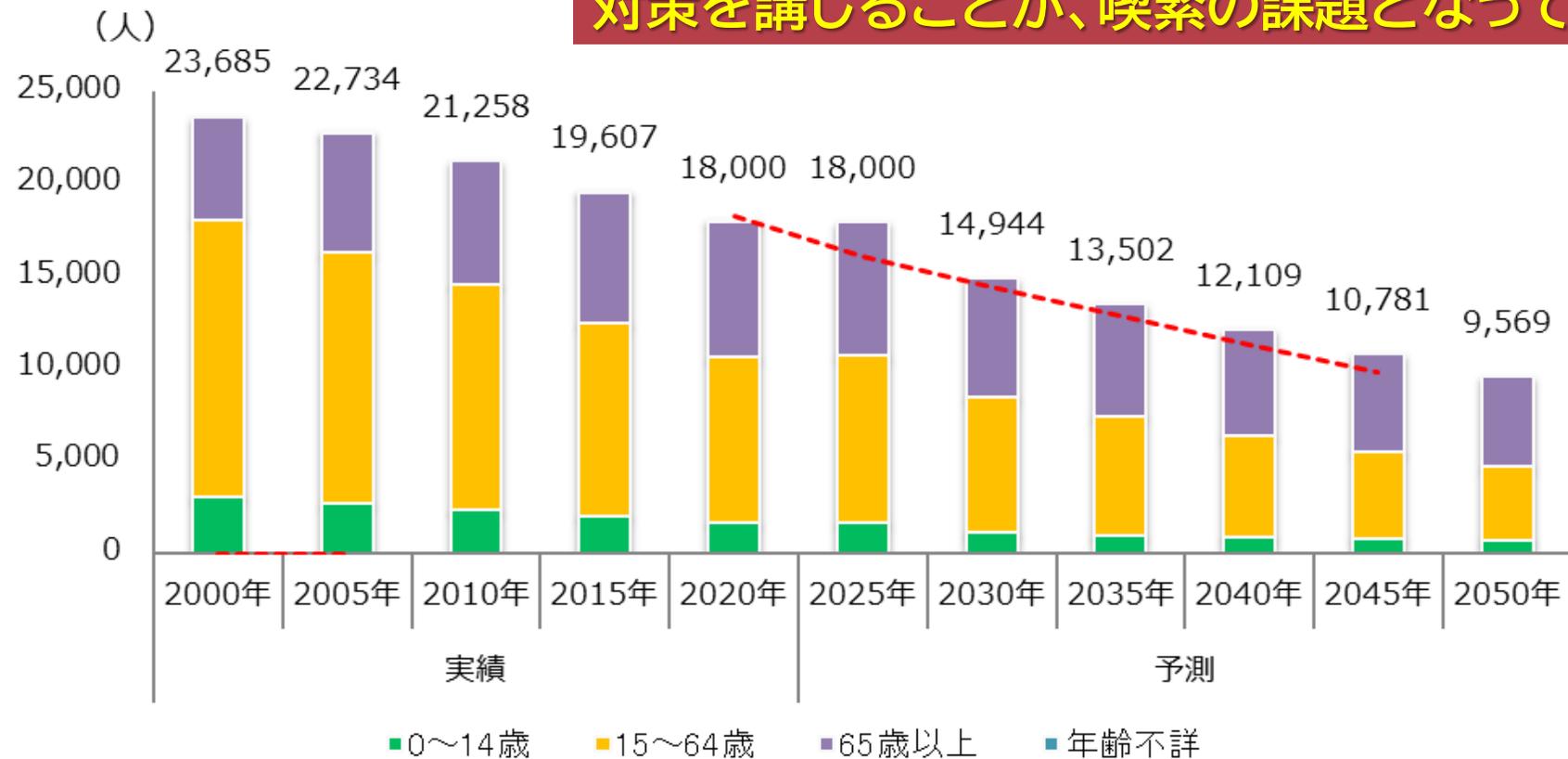


海産物

人口減少の実情

全国的、特に地方の人材不足の問題と同じく、
当法人でも、将来的な介護人材の不足への
対策を講じることが、喫緊の課題となっている。

余市町の人口推移



【2020年】

総面積 (km²) 141

平均年齢 (歳) 53.7

昼夜間人口比率 (%) 97.0

人口密度 (人/km²) 128.0

※昼夜間人口比率のみ2015年時点

※図中の点線は前回2018年3月公表の「将来人口推計」の値 © jp.gdfreak.com

社会福祉法人 よいち福祉会

平成2年に余市町の高齢者福祉事業を担う法人として設立。その後、児童福祉事業を担う法人との合併、自治体から保育事業を受託し、余市町を中心に、周辺の仁木町、積丹町、蘭越町および札幌市にて、福祉事業を展開している。

法人職員：283名



よいち福祉会 高齢者福祉事業

高齢者総合福祉施設

フルーツ・シャトーよいち

介護老人福祉施設、短期入所生活介護、通所介護、認知症対応型共同生活介護、居宅介護支援事業所などが併設された

総合福祉施設・フルーツ・シャトーよいちを中心に高齢者福祉事業を展開。

入所施設（短期入所事業併設）

特別養護老人ホーム フルーツ・シャトーよいち
 地域密着型特別養護老人ホーム ゆうりり
 サービス付高齢者向け住宅 ふるーつの郷
 サービス付高齢者向け住宅 めくもりの郷
 高齢者グループホーム フルーツ・シャトーよいち

通所施設

デイサービスセンター フルーツ・シャトーよいち
 デイサービスセンター ぷらっとよいち
 デイサービスセンター よいち銀座はくちょう

訪問事業

ヘルパーステーション ふるーつ
 フルーツ・シャトーよいち訪問看護ステーション

受託事業

余市町地域包括支援センター
 余市町配食サービス

研修事業

介護職員初任者研修事業所

北海道余市紅志高等学校

平成22年に余市高校、周辺の古平高校、
仁木商業高校が統合。全校生徒数84名。
余市町で唯一の公立高校。

令和6年度に募集生徒が40名・1クラスとなり、
入学者の減少が見られる中、**地域と連携を図り、**
「地域の子どもは地域で育てる」をスローガンに
掲げ、自分の力で考える生徒を育てることに、
尽力している。

また、生徒の可能性を広げ、専門性の高い
3系列のカリキュラムを設け、**「生活・福祉系列」**
では、介護分野の教育にも注力している。

学校教育目標

社会で生きて働く力を身に付け、
自分の力で逞しく未来を切り拓き、
地域の創造に貢献できる人の育成

卒業生



宇宙飛行士
毛利衛さん



札幌オリンピック金メダリスト
日の丸飛行隊
笠谷幸生さん



福祉講話とグループワーク

1年生から2年生になる際に、福祉科目を選択するかを決める学校カリキュラムとして実施。

当施設職員8名（介護職員・相談職員）が参加。
職員が講師となり、福祉の存在意義、福祉の仕事のやりがいなど、伝えるとともに、グループワークを行い、生徒たちが考えを示し合い、共有し、話しあう機会を創出した。



介護職員初任者研修の職員派遣

「生活・福祉系列」を選択し、福祉系科目を履修している2年生を対象にした介護職員初任者研修に、職員を派遣した。



バリアフリー農園

当施設内に高校生、福祉系専門学校が協働で、バリアフリー農園(=障害の有無や年齢などに関わらず、誰でも農業体験ができるように工夫された農園)を設け、当施設の入居者とともに、半年間に渡り、種まきから収穫まで協働・交流活動にて行った。



課題研究とは？

高校における「**課題研究**」は、生徒が自分でテーマを選び、そのテーマに基づいて研究や探究活動を行う授業の一環です。生徒の主体的な学びを支援し、将来の進路選択やキャリア形成にも役立つ重要な教育活動です。

内容

1. **テーマ設定:** 生徒が興味を持つテーマを自ら選ぶ。
2. **計画立案:** 研究の目的や方法を計画する。
3. **情報収集・分析:** 文献調査や実験、アンケートなどを通じてデータを集める。
4. **まとめと発表:** 研究結果をまとめ、プレゼンテーションやレポートで発表する。

目的・意義

1. **自主性と創造性の育成:** 自分で考え、実行する力を養う。
2. **問題解決能力の向上:** 問題に対処し、解決する力を高める。
3. **学問的探求心の喚起:** 学問への興味と知識を深める。
4. **コミュニケーション能力の向上:** 発表を通じて表現力を磨く。
5. **キャリア形成への貢献:** 将来の進路選択に役立つ経験を積む。

令和3年度より、余市紅志高校の課題研究「福祉班」にて、当施設職員が毎週、高校へ出向き、サポーターとして、高校生と一緒に活動している。

地域の高齢者福祉に関する講話〈令和3年度〉

研究テーマ「**高齢になっても『いつまでも住み続けたい』と思える余市町の福祉のあり方**」と定め、地域で高齢者福祉に関与している方から話を伺うことにした。〈本テーマは次年度、次々年度へ引き継がれていく〉

高校生が希望した高齢者福祉の関与者の講話をコーディネート。

- ・ボランティア団体代表
- ・特養入居者と家族
- ・視覚障害のある高齢者と家族
- ・介護支援専門員と訪問介護職員



教員、当施設職員がファシリテーターとなり、グループワークを実施し、KJ法を用いた分析を行ない、高齢者にとって「大切なこと」をまとめた。

- ・人の関わり
- ・健康
- ・介護サービス
- ・相談できる場所

地域の高齢者福祉活動の取材と広報活動 〈令和3年度〉

各団体の活動、高齢者福祉サービス取材し、紹介するリーフレットを製作、回覧板として、地域の皆さんへ配布。高校生は、「**地域の皆さんが、高齢者を支える地域資源を知ることが大切である**」という研究結果を根拠をもって報告した。



食生活改善推進委員会へ取材



デイサービスへ取材



ボランティア団体へ取材



地域包括支援センターへ取材

**高齢になっても「いつまでも住み続けたい」と
思える余市町の福祉のあり方**
余市紅志高校 × フルーツ・シャトーよいち 協働研究

津島管内唯一の総合学科北海道余市紅志高等学校は、2年次において総合的な探求の時間「課題研究Ⅰ」という学習プログラムがあります。その中で、私たちの福祉班は「高齢になってもいつまでも住み続けたい」と思える余市町の福祉のあり方についてテーマで、令和3年4月から半年間、高齢者福祉担当施設フルーツ・シャトーよいちと協働して研究を進めてまいりました。

「住み続けたい」と思えるために大切なことって何だろう？

この研究をするにあたって、余市町で活躍されている高齢者、障害者、高齢者、介護サービスを提供している企業、高齢者、高齢者を支えるために活躍している企業、お話を伺いました。

私たちの気づき
「いつまでも余市町に住み続けたい」と思えるために大切なこと

人との関わり 健康 介護サービス 相談できる場所

これら「大切なこと」を実践している町内の活動及び施設を取材いたしました。そして、私たちがなによりも大切に思ったのは、これらの活動を「地域の皆さんに知っていただくこと」だと思いました。そして、私たちが取材した4つの活動・施設を皆さんへ紹介します。

<p>ふまねっと 会場：中央公民館 こぶきの家など 《問い合わせ先》 《問い合わせ先》 TEL:090-7654-7595</p>	<p>食生活改善推進委員会 《問い合わせ先》 《問い合わせ先》 TEL:0135-23-3786</p>
<p>デイサービスセンター よいち銀座はくちよう 住所：黒川町2-91 《問い合わせ先》 TEL:0135-48-5544</p>	<p>余市町地域包括支援センター 場所：イオン余市店1階 9時～19時 年中無休 《問い合わせ先》 TEL:0135-48-6015</p>

ふまねっと 高齢者活動を通して人々の関わりを促す力が得られました

【ふまねっと】高齢者活動を通して人々の関わりを促す力が得られました。高齢者活動を通して人々の関わりを促す力が得られました。高齢者活動を通して人々の関わりを促す力が得られました。

食生活改善推進委員会 食を通して、市民の健康を促進する活動を行っています

食を通して、市民の健康を促進する活動を行っています。食を通して、市民の健康を促進する活動を行っています。食を通して、市民の健康を促進する活動を行っています。

**デイサービスセンター
よいち銀座はくちよう** 介護施設が暮らしやすい町づくりを推進しています

介護施設が暮らしやすい町づくりを推進しています。介護施設が暮らしやすい町づくりを推進しています。介護施設が暮らしやすい町づくりを推進しています。

余市町地域包括支援センター 介護や医療との連携を推進しています

介護や医療との連携を推進しています。介護や医療との連携を推進しています。介護や医療との連携を推進しています。介護や医療との連携を推進しています。

まとめ この研究を通して、高齢になっても「いつまでも住み続けたい」と思える町づくりを実現するために、必要な取り組みや課題が明らかになりました。

この研究を通して、高齢になっても「いつまでも住み続けたい」と思える町づくりを実現するために、必要な取り組みや課題が明らかになりました。この研究を通して、高齢になっても「いつまでも住み続けたい」と思える町づくりを実現するために、必要な取り組みや課題が明らかになりました。

地域の回覧版で配布したリーフレット

多世代交流イベントの開催〈令和5年度〉

職員より、これまでの課題研究の取り組み、当法人の高齢者福祉事業を紹介。

高校生より、世代を超えた相互理解を目的とした多世代交流イベントの開催の発案。

地域交流活動を実践している社会福祉法人の視察、インタビューを実施。

子どもをターゲットにしたイベントを企画・立案し、チラシを製作して、小学校へ告知。

当法人のデイサービスセンターにて、高齢者（利用者）、高校生、中学生、小学生、幼児、地域住民が集う、多世代交流イベントを開催。



小学校へ配布
したチラシ



北海道新聞 掲載記事 令和6年1月9日 多世代交流イベント

紅志高生が企画 多世代交流の場

ゲームなど楽しむ

【余市】余市紅志高の生徒らが発案した地域交流イベント「あつまれ！ふらっとのひろば」が、町内のデイサービスセンターふらつと・よいちで開かれ、幼児



ピンポン球をバケツに入れるゲームを楽しむ高齢者と子どもたち

から90代までの約20人がゲームなどで親睦を深めた。同校では探究の授業で福祉を学ぶ2年生が、町内の高齢者総合福祉施設「フルーツ・シャトーよいち」と地域共生社会をテーマに共同研究を行っている。3年日は「いつまでも住み続けたい余市町の福祉の在り方」を課題に選び、多世代

が気軽に集える場をつくらうとひろばを企画。昨年12月23日に初開催した。

最初は戸惑い気味だった参加者は、生徒が考えたピンポン球を使ったゲームなどを楽しむう

ち、すっかり仲良しに。90歳の男性は「孫ができたみたいでとても楽しい」と顔をほころばせた。同校2年の須貝怜奈さんは「町内には若者と高齢者が触れ合う場が少なく、これを機会に交流の場を広げていければ」と話した。

(伊藤圭三)

多世代交流イベントの開催〈令和6年度〉

昨年度から継続し、さらに様々な地域住民に集まってもらえるようなイベントを提案。当施設を会場にして、小さなイベントを頻回に行うことで地域の方々に認知してもらい、継続した取り組みになるようにした。



1. 中学生と「放課後遊び」（2回開催）
2. 地域のボランティアと「じゃがいも植え」
3. 地域の皆さんと「夏の交流会」
4. 地域の皆さんと「じゃがいもの収穫祭」

ところが、「放課後遊び」の中学生参加者はゼロ。地域のニーズを把握し、告知方法を見直すために、中学生へのインタビュー、地域の社会福祉協議会、近隣の町内会会長へ相談を実施。



2回目の「放課後遊び」では、中学校へお迎えに行き、「夏の交流会」では、近隣住民へチラシの投函をした結果、多くの地域の皆さまが参加し、多世代交流を実現できた。（じゃがいもの収穫祭は9月に開催予定）



北海道新聞 掲載記事 令和6年6月19日

お互いを理解 交流の輪を広げよう



【余市】子どもから高齢者まで地域の人が気軽に集える場をつくらうと、余市紅志高生が奮闘している。3年の課題研究の授業「地域貢献」で福祉を学ぶ7人で、町内の高齢者総合福祉施設「フルーツ・シャトーよいち」と連携。本年度は同施設を拠点に催しを開き、「少子高齢化」への処方箋を模索している。

余市紅志高生福祉施設と連携

イモ植えなど催し 介護職に就く不安拭う

5月26日の交流会。紅志高生と施設利用の高齢者計15人が、的に向けて玉を転がし近さを競うポッチャを楽しんだ。生徒は「次回（7月16日）は中学生にも参加してもらい、交流の輪をさらに広げたい」と意気込む。総合学科の同高で福祉の学習が始まったのは2021年度。フルーツ・シャトーの「将来を担う高校生と福祉を考えたい」との呼び掛けに応じ、週1回のペースで学ぶ。

コロナ禍のため21、22年度は高校での授業が中心だったが、昨年1月に町内のデイサービスセンターで幼児から90歳までの約20人がゲームなどを楽しむ交流会を初めて開催。高校生が考える「若者と高齢者が触れ合う場」を目指す一歩となった。本年度はフルーツ・シャトーの畑を利用した収穫祭や「夏の交流会」など5回ほどの催しを計画している。一緒に企画・運営する中学生から大人までのボランティアを募集。今月11日には町内で活動する2人のボランティアを迎え、施設の高齢者約10人とイモ植えを楽しんだ。

指導する太田絢子教諭によると、少子高齢化や人口減で、子どもや若者とお年寄りが触れ合う機会が減少。この結果、交流経験が乏しい若者たちは、人手不足が深刻な高齢者介護の現場で働くかと思っても、不安がつきまとうという。

太田教諭は「多世代が集える場をつくることで互いの理解が進み、安心感が芽生える。生徒の試みは地域福祉の充実を促す一つの方法」と指摘。施設側も「若い人にごでの暮らしを知ってもらう」と期待する。

福祉系の仕事を目指す3年の須貝玲奈さんは「催しの準備など難しい面もあるが、やりがいを感じる」と目を輝かせている。

（伊藤圭三）

▲フルーツ・シャトーよいちの利用者と一緒にイモ植えを行う紅志高の生徒

本取り組みの効果・成果

高校生の意識改革

生徒各々が**高齢者のもつ活力**に気づき、**福祉の必要性**を再認識した。

生徒各々の視点が変わり、**自分たちで何かをしようとする意識の高揚**を醸成できた。

将来を見据え、**介護職への関心**を高めるきっかけとなった。

高齢者の喜びと活力

高校生との交流が**高齢者にとって大きな喜び**となり、**活力**となった。

世代を超えたコミュニケーションが**高齢者の生活の質**を向上させた。



本取り組みの効果・成果

福祉人材の育成と確保

本取り組みを通して、
福祉関連の進学や就職をした高校生が多数いた。

余市紅志高校から、**当施設に3名の卒業生が就職**することにつながった。

余市紅志高校の現役高校生のアルバイト雇用が通算6名になった。



さらなる連携強化へ

当施設と高校の連携が強化された。

- ・当施設職員の社会人講話の開催
- ・高校生が取り組む町内ハザードマップの英語版資料の作成を
当施設の外国人技能実習生が協力
- ・・・さまざまな場面での協力関係が続いている。

本取り組みの効果・成果

地域福祉の充実

地域共生社会を啓発する高校生製作の回覧板の閲覧、新聞紙面における紹介、イベントに参加いただいた方々の口コミにより、高校生の活動が話題となり、**地域共生社会の啓発**に寄与することができた。



夏の交流会に参加したボランティア



ボランティアの方々と打ち合わせ

協力いただいた地域の皆さんからは、

「自分の住んでいる町の唯一の公立高校と地域について考える、非常によい取り組みである。」

「自分たちも地域の高校生の成長に関わることが出来て良かった」

などの声が寄せられ、**地域共生社会、多世代交流への高い関心、本取り組みの意義**を確認することができた。

地域とのさらなる連携へ

高卒者の採用・育成について、学校との連携を通して、理解を深めることが出来た。

今後は、地域のボランティアとの協働を深め、イベントの企画・運営を行っていききたい。

地域の小中学校と連携することで、若年層の福祉への関心や興味につながり、さらに、高齢者にとって、喜びや活力につながる機会を作りたい。

安定した福祉人材の確保と地域共生社会の実現に向けて

地域住民のニーズをつかみ、多世代が交流しつながることが出来る機会や場、そして、明日の地域を担う若者たちが、介護・福祉に興味を抱いてもらえる機会や場を継続的に創出していくことが大切だと思います。

これからも、地域共生社会の実現のため、多くの方々とつながることが出来るように、地域の皆さんとともに、取り組みを継続してまいります。

高齢者総合福祉施設

フルーツ・シャトーよいち